

## 映画と倫理——ディスカッションのために

斉藤綾子 (映画研究者)

「すべての映画はフィクションである」とかつてクリスチャン・メッツは言った。「すべての映画はドキュメンタリーである」とはビル・ニコルズの言である。フランスを代表する映画理論家、アメリカを代表するドキュメンタリー研究者、どちらもある意味では正しい。だが、個別の映画について語るときにはやはりこの間の微妙な差異が問題になる。『極北のナヌーク』『糧なき土地』から『意志の勝利』『戦ふ兵隊』まで、ドキュメンタリー映画は、常に美学と倫理の間を揺れ動いてきた。

そんな問題に正面から取り組もうとするのが、今回開催される企画の一つである「6つの眼差しと〈倫理マシーン〉」だ。仕掛け人は藤岡朝子と阿部マーク・ノーネス。マーク、英国の映画・メディア研究者のブライアン・ウィンストンという白人男性の専門家に交じって、私は、アジア女性として、そしてドキュメンタリーに関してはまったくの素人にもかかわらず参加することになった。だが、こうしたサブライズもそれも映画祭の楽しみの一つだ。ディスカッションの究極のテーマは、映画と倫理である。

映画祭でおなじみの上映後の監督とのティーチインや研究者を中心としたシンポジウムとは異なり、今回の企画では監督と観客との間に討論を導き出し、双方向に語り合う機会を作りたいという意図がある。マーク、ブライアンと私は、作り手と観客の間にディスカッションを生み出す役割を果たすことになっている。「6つの眼差し」とは「危険にさらされた眼差し」「介入する眼差し」「人道的な眼差し」「偶発的な眼差し」「プロフェッショナルな眼差し」「無力な眼差し」を指し、ドキュメンタリー映画におけるカメラの視線と世界を分類しようとするものである。ドキュメンタリーでは、作り手、カメラ、カメラが捉える被写体との関係性がフィクション映画より、より直接的に観客との関係に影響する。映画祭という空間の中で、作る人、見る人、語る人が一体になって、ドキュメンタリーというジャンルが映画という制度そのものに突きつける問題は何か。そんな問題意識で語り合える場を作れたらと思っている。

### ■イベント

#### 対談「映画監督と倫理」【EM】

ゲスト：ジョシュア・オッペンハイマー、原一男

..... 10/13 15:00-17:00 [M5]

#### ディスカッション「6つの眼差しと倫理」【EM】

パネリスト：阿部マーク・ノーネス、斉藤綾子、ブライアン・ウィンストン

..... 10/14 12:50-14:50 [M5]

#### ディスカッション「震災映画と倫理」【EM】

司会：斉藤綾子

..... 10/15 16:00-17:30 [M5]